

## 目指す地域像の意義と取り組み方

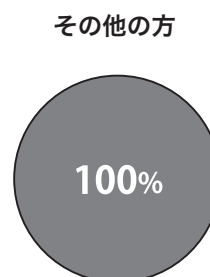
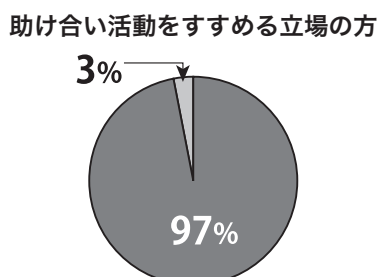
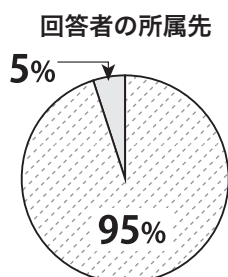
### 提言

住民の声を基に「目的に応じた地域像」をつくり、共有することで、ニーズに適切に応える活動を創っていきましょう！

### 登壇者

【進行役】	高橋 望	(公財) さわやか福祉財団
	岡村 美花氏	武蔵村山市南部地域包括支援センター長
	斉藤 節子氏	南アルプス市第1層SC
	小林 陽一氏	南アルプス市第2層SC
	中川 史高氏	うきは市第1層SC
	平野 歌織氏	長野市第2層SC

アンケートの結果 参加者概数：493名（オンライン：482名、会場：11名） 回答者数：113名



「活動づくりを頑張っているのに住民があまり協力してくれない」

この原因は「目指す地域像」が住民に共感・共有されていないことにあるのではないだろうか。目指す地域像は住民主体の活動創出の基盤となるもので、ここが希薄になると「やらされ感」が生まれてくることにもなる。

本分科会は「助け合い活動には目指す地域像の共有が必要」と確認された大阪サミットからの継続テーマで、住民が共感する目指す地域像の策定と具体的な共有方法について議論した。

岡村美花氏（武蔵村山市）からは、活動創出への取り組みは目指す地域像のイメージ共有からスタートしており、現場視察バスツアーやフォーラム、地域懇談会などを実践、助け合い活動ビデオも活用していること。目指す地域像を丁寧に共有していくことで住民から「やろう！」と言ってくれ、サロンや生活支援活動が立ち上がっている事例が報告された。

斉藤節子氏（南アルプス市）からは、市の現状をありのままに伝え、住民と話し合っていたこと。最初は反発している人でも地域・人に対しては愛情を持っており、話を続ける中で協力者になってくれる例も報告された。現実のニーズが見えることで、目指す地域像が浮かび上がってくる様子が伝えられた。

南アルプス市は自治会単位での第3層協議体も設置されつつある。第2層協議体のニーズから生まれたことが特徴で、設置しない地区もある。第3層の支援も行う第2層SC・小林陽一氏からは、協議体毎に異なる目指す地域像があり、個別ニーズが見えると必要な活動が明確になり取り組みやすくなることが報告された。

中川史高氏（うきは市）からは、住民の「つぶやき」は目指す地域像の「種」であること。地域は変化していくため、目指す地域像は繰り返し設定・共有していく必要があること。目指す地域像を共有することは、企業との協働を進めるだけでなく、縦割り解消にも効果を発揮し、スクールバス活用の高齢者送迎支援等も出来てきていることが発表された。

長野市の大豆島地区では「地域福祉活動計画」策定をきっかけに、ワークショップ形式の住民福祉懇談会で住民ニーズを集めて目指す地域像をまとめている。第2層SC・平野歌織氏からは、目指す地域像を具体的な活動に移していくために再び懇談会を開催し共有、住民同士で「自分たちで出来ること」を話し合ったこと。ワークショップの継続実施によって、住民の共感が高まり活動が生まれやすくなったことが報告された。

実践者報告の共通項は「リアルなニーズを実感すると住民は動く」ということだ。目指す地域像を共有すると、困りごとを実感した住民が主体的に動くことが明らかになった。住民の生の声は、普段の何気ない会話からも拾えること、話し合いの場づくりが有効であることが示され、小さな範囲の方が具体的なニーズを把握しやすいこともわかった。

地域像共有には各種の周知方法が有効だが、特にワークショップは住民の考える機会となり、その後の活動に繋がりがやすいことも示された。目指す地域像は変化するため、継続的なワークショップ開催が効果的であり、活動継続のポイントになることも指摘されている。

提言は以上の協議からまとめられ、会場と画面の向こうの参加者に登壇者全員で手を振りながらエールを送り終会とした。

### ■ 寄せられた声から

- 地域像は常に変化していくものであると認識し、継続するための取り組みや見直しが必要。
- 「活動前のニーズ把握だけでなく、活動後もニーズ把握に努める。地域像は固定ではなく変わり続けるから」という言葉が印象的でした。
- 中川さんが協議体以外のつぶやきも拾っていくという話をされていて地域を作るうえで大切だと感じました。
- 南アルプス市の第1層、第2層SCの協議体立ち上げ事例を参考に、私の地域でも立ち上げに繋がられればと思います。
- それぞれの地区の実践例はとても参考になりました。最後は私も画面に向かって手を振りました。